

地質標本館のできるまで

松江 千佐世¹⁾

はじめに

地質標本館の完成。それは、まさに夢の実現ともいえるできごとでした。

昭和46年12月4日、それより以前からずっと長い間検討され続けてきていた筑波への移転についての工業技術院「試案」に対して、地質調査所としていくつかの前提条件を付けて、移転計画に参加することを正式に公表しました。同12月5日、工業技術院は、院議で在京の9試験研究所が計画に参加することを決め、翌6日、通商産業省は、省議で「工業技術院試験研究機関の筑波研究学園都市への移転について」を決めました。この日以降、筑波移転計画は、通産省の正規のプロジェクトとして軌道に乗っていきます。地質調査所では、昭和48年3月31日の部長会議で、筑波に新しく地質標本館を設けるという前提で、「地質標本館の性格 および 地質標本館の施設設備の前提条件」「レイアウトのための小委員会 標本館およびそれに関連する展示・陳列のレイアウトのための小委員会を研究環境専門部会の下部機構として発足させる」ことを決めました。

以上のような決定などにもとづいて、昭和48年4月24日、地質標本館レイアウト小委員会（以下小委員会と略す）の第1回会合を開催しました。小委員会発足当時のメンバーは、委員長：神戸信和、委員：小村幸二郎、坂巻幸雄、名取博夫、片田正人、事務局：松原秀樹、松江千佐世、アドバイザー：磯見博、大町北一郎、その他に企画室から岡野武雄の10名で構成されていました。地質標本館の設立を前提として、地質標本館の機能、果たすべき役割、展示の基本構想などについての様々な検討を小委員会のメンバーを中心として進めていくことになりました。ただし、所員の他に地質系博物館に関するディスプレイ専門家を有する丹青社科学造形研究センターの協力を受け、また積極的な助言も得ながらのことでした。

本気になれない

地質標本館の建設が決定される昭和52年12月29日の予算確定までは、地質標本館が本当に実現できると考えていた人ははたして何人いたのでしょうか。小委員会に出席していた関係者の中にも本当にいたのでしょうか。当時の地質調査所員の中には、「たしかにできるならば素晴らしいが、全体の状況から冷静に考えると、どうせ地質標本館なんか実現できないだろう」との見方をする人達が大半であったと記憶しています。小委員会のメンバーに、小委員会開催の案内を配って出席をお願いしながら、私自身も疑問を抱いていたのは事実で、本当のところ「地質標本館の建設実現」はほとんど不可能なのではないかしらと思っていました。これは、今だからいえることなのですが……。半信半疑もしくは全然本気にしていない小委員会の各メンバーに出席をお願いして回るとは、仕事とはいいながら、その当時非常に空しく思えることでした。

多くの人の協力で

小委員会を度重ねて開催していくうちにメンバーも追加・補強され、小委員会発足当時は前述のように10名という小人数でしたが、48年度には18名、49年度には26名、50年度には29名、51年度には29名、52年度には32名、53年度には42名、54年度には47名へと増えていきました。

地質調査所全体には、前述のような状況がありましたけれども、地質標本館建設の予算が確定する前の段階で、昭和48年4月24日の第1回小委員会から昭和52年11月16日の第27回小委員会まで、所員で延べ339人、所員以外で延べ23人（丹青社および日本設計）の出席を得ることができました（第1表）。同期間において、27回におよぶ小委員会を含めて、それとは別に所内の展示プランの各テーマ別担当者や丹青社科学造形センター担当者との間で開催された打ち合わせ会は、なんと100回以上におよんで行われたのでした。半信半疑ではありながらも、小委員会への出席がわりとよかったのは、委員長の地質標

1) MATSUE Chisayo, 地質調査所 地質標本館

第 1 表 小委員会への出席状況

	開 催 日	出 席 者 数	
		所 内	所 外
第 1 回	昭和48年 4月24日	8人	
2	5月 4日	10	
3	5月11日	8	1
4	5月30日	8	1
5	6月 8日	10	1
6	6月29日	8	
7	10月31日	11	1
8	11月30日	12	1
9	昭和49年 2月14日	15	
10	2月22日	10	
11	6月 7日	10	
12	6月19日	13	
13	8月13日	17	1
14	10月31日	19	1
15	12月27日	15	
16	昭和50年 2月12日	15	2
17	4月23日	17	
18	7月30日	10	1
19	8月13日	8	2
20	8月27日	16	2
21	10月30日	19	1
22	12月22日	13	1
23	昭和51年 2月13日	14	1
24	7月14日	15	
25	9月16日	16	2
26	昭和52年 3月14日	11	1
27	11月16日	11	3
計		339	23

本館建設に対する情熱と熱意，そして根性があればこそと今更ながらつくづく思います。

小委員会のメンバーにも委員長の情熱と熱意，そして根性が大きく影響していたのではないかと思います。事実，小委員会のメンバーのほとんど全員から，「委員長から何度も小委員会への出席は確かめられたよ。それなのにまた？」という声を何度となく耳にし，しつこいなあと思われていました。小委員会の各メンバーに，ひやかされたり，からかわれたりしたことはしばしばありました。小委員会のメンバーの中には，委員長の情熱と熱意，そして根性に負けてしまって仕方なく出席していた方も何人かいたことは確かだと思います。それと，地質調査所にとって地質標本館の建設というのは，地質調査所創立以来の強い要望ではありましたが，実現されないうまで来ていました。好機を捕らえて何度となく検討されてきましたが，実現するには至らないできていたという経過がありました。というような訳で，地質標本館の建設は，地質調査所にとって創立以来の長年の夢であったといえます。その長年の夢が「筑波移転という一大事業を契機に，もしかして本当に実現できるかもしれない」とのかすかな(?)希望が小委員会の各メンバーに芽生えていたことも大きく影響したようにも思えます。そして，忘れてはならないことのひとつに，工業技術院と小委員会との間の重要なパイプ役として筑波計画室をはじめとする関係者の方々のご尽力を頂けたことがあります。

所外の強力な力

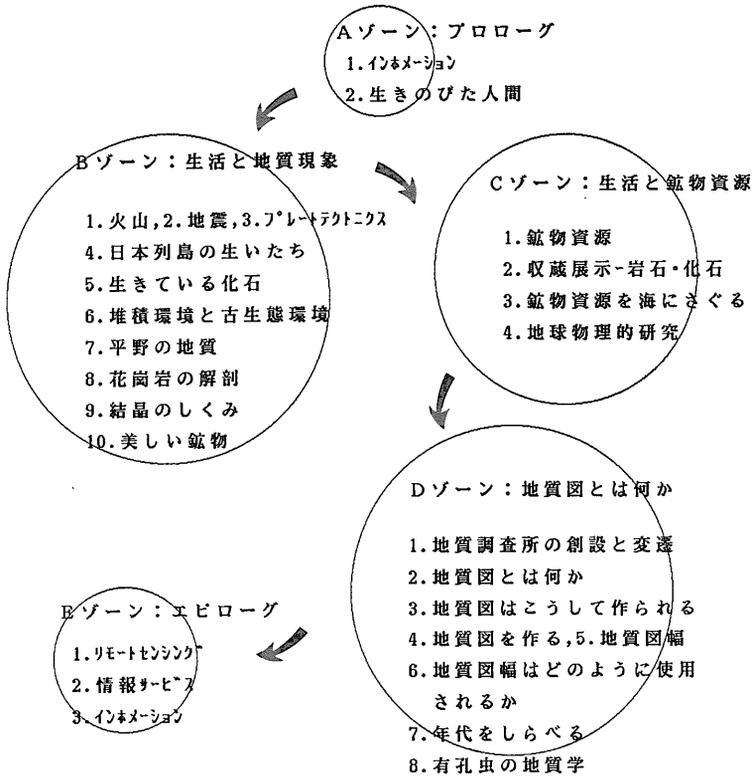
所内の人の協力ばかりでなく，所内でも前述の丹青社科学造形センターをはじめ日本設計，工業技術院計画課や同研究業務課，そして建設省に当時おられた方々にも大変お世話になっていました。なかでも，当時の工業技術院計画課や同研究業務課の方々のご理解と寛大なる対応があればこそ，夢の実現も可能となったともいえると思います。

運よく，最近その当時の工業技術院計画課におられた方に会う機会に恵まれましたので，当時の裏話をお聞きすることができました。ここに，簡単に紹介させていただきます。光川寛氏談「工業技術院計画課から，移転に際して各試験研究所に当時としては内々のこととして，『少々贅沢なものでもよいから各所の目玉となるようなものでこの際作って欲しいものを提出して欲しい』ということと各所からそれぞれ提出してもらいました。その中に，地質調査所から地質標本館，機械技術研究所からの試走路などがありました。結局，各所からだされたものはその当時では，無理とも思えるような要望もないわけではありませんでした。『移転してもらえないと困る』とのことでそれらの実現のために，かなりの精力を注ぎ込みました。計画課としては，予算の関係でいろいろな問題もありましたが，何とか実現できるように頑張りました。結局，それらは移転の際には各所の希望どおり，ほぼ実現することができました。各所ごとの目玉として実現したものの多くは，内部的な設備などとして目立ってはいないので，結果的に，地質標本館が最も目立った存在になりました。それは，地質標本館が一般に公開されているという性格を本質的に持っているため，国民との直接的なつながりの場となっているためでしょう。」

いい勉強になりました

地質調査所の各研究分野についての専門的知識の全くない私にとって，小委員会や展示の各テーマ別打ち合わせ会に同席して，会議のメモを作成する仕事は，とても厄介なことでした。専門用語については，その内容が私には理解できないことがほとんどという状況でありました。何もわからないまま，会議のメモをなんとか作らなければいけないということから，会議中はかなり緊張し相当神経をつかって，積極的に繰り広げられる議論に耳を傾け続けていました。私には，理解できない内容ばかりではありましたが，地調の各専門分野における話を研究者の方々から直接聞くことができました。

何しろ，「地質調査所の研究活動の紹介と地球科学の



第1図 展示テーマ

普及」を地質標本館の使命の一つとしていましたので、展示テーマも豊富でありました。展示テーマは、時間的経過の中で多少変遷していきましたが、最初に検討されていた段階で、第1図にあるように、大テーマが3つ（①生活と鉱物資源、②生活と地質現象、③地質図とは何か）、さらに小テーマで24ということから考えても、地質調査所の各研究分野をほぼカバーしていた訳で、このことは本当に幸運なことでありました。地質調査所を知るのには絶好のチャンスではありました。どちらかという、かたい難しい話ばかりなのですが、当時の私にとっては、わからないながらもとても興味をひかれる内容ばかりで本当にいい勉強になりました。各テーマ別担当者の展示構想に対するそれぞれに熱意に満ちていたあの頃が非常に懐かしく思い出されます。地質標本館という時、私にとっては今でもどうしても忘れることのできない時期となっています。本当に大変な苦勞ではありましたが、私にとって一番いい時期だったのではと思っています。

この人あってこそ

地質調査所の中で、ただ一人最初からずっと地質標本

館の建設を信じて疑わないで情熱を持ち続けている人がいました。それは、誰だろう。小委員会の神戸委員長でありました。地質調査所の所員からどんな言葉をなげかけられても、ひたすら信じ続けていた神戸委員長のあの情熱と熱意、そして根性が、もしもなかったなら、多分今日の地質標本館はなかったのではないかとあらためて思っています。

おわりに

地質標本館は、昭和55年3月末に完成し、同年8月19日より一般公開が開始されました。はやいもので、一般公開以来まもなく10年を迎えようとしています。この10年間で館長も7人を数えました。歴代館長はじめ多くの方々のご努力により、現在の地質標本館が成り立っています。地質標本館のさらなる発展を願っています。

なお、この原稿作成に当り、通産省の光川 寛、元館長で現在上智大学講師の神戸信和、地質標本館の坂巻幸雄の諸氏に大変お世話になりました。ここに厚くお礼申し上げます。（文中の敬称は略させて頂きました。）

<受付：1990年5月8日>